

美女マルセーラのパロディとしての 美女キテーリア物語

2022/03/30



貧乏な若者バシーリオが絶世の美女キテーリアを手に入れるお話 「恋と戦争には手段を選ばず」

流浪の旅をつづける騎士ドン・キホーテと従者のサンチョ・パンサが、途中で、四頭のラバに乗った人たちに出会いました。彼らは、ドン・キホーテとサンチョを、今日、開かれる村の結婚式に招きました。[全集版:後篇第20章 415頁]

われわれと一緒においでになりませんか？ ラ・マンチャどころか、この周辺で、いままでかつて催されたこともない、素晴らしい、豪勢な婚礼がご覧になれますよ。百姓と百姓娘の婚礼ですが、男はこの土地きっての大金持だし、女のほうは、およそ人の眼にうつった第一の美人です。花嫁はものすごく美しいものだから、美人のキテーリアと呼ばれ、花婿のほうは金持カマーチョと呼ばれているんです。女の年が十八、男は二十一で、まったく好一対です。

ところが、美人のキテーリアには幼なじみのバシーリオがいて、二人は仲が良く、大きくなったら結婚するものだと本人たちも、村人たちも思ってい

ました。

そのうちに年頃になってくると、キテーリアの父親はこれまで自分の家へ許していた日頃の出入りをバシーリオにことわろうと思いつきました。そこでやきもきしたり、取越し苦勞からのがれようと、娘を金持カマーチョに嫁にやることにきめたのですが、これは持って生まれた才能ほどに、物質的な財産のないバシーリオに娘をめあわせたくなかったからでした。ところで、うらやむことなしに、本当のことを申しますと、あの男はわれわれが知っている中でももっとも敏捷な青年で、棒投げも上手なら、すばらしく相撲のうまい、それに球戯の名手で鹿のように走り、山羊よりも跳び、まるでうそのようにポーロ倒しをやるし、ひばりのようにうたうし、ギターを弾かせると、まるでギターがものを言っているようだし、なかでも、剣を使わせたら達人ですね。

このバシーリオが「剣の達人」と言うことにご注意ください。

結婚論

ここで、サンチョ・パンサとドン・キホーテの間で、「結婚論」が展開されます。まず、サンチョ・パンサが、「好きな者同士が結婚するのが当たり前だ」といいます。

「わしの気持ちを言うと、そのバシーリオどんは、いつの間にかわしは好きになっちまったが、キテーリアさんといっしょになったらいいだ。おたがいに好いた同士がいっしょになるのを邪魔するやつらは、いい来世を送って後生楽を（実はこの反対のことを言うつもりだったのだが）しゃがれだ」

それについて、ドン・キホーテは、反対の意見を述べます。結婚の相手とは長い間一緒にいるので、生命のつづく限りその関係はつづく。そのために、相手を選ぶのには、判断の目が必要だ。「特別な勸と天の恩寵が要求される」と説くのです。若い本人同士の衝動で結婚を決めるのではなく、周りの賢明な人たちの判断で結婚を決めるのがスジだとドン・キホーテは説くのです。この場合も、美人のキテーリアは、親が決めたお金持ちのカマーチョと結婚すべきだというのです。若者たちには、厳しい意見です。

さあ、結婚についての考え方が二つに分かれました。「二人の同意と愛があればそれで良い」というサンチョ・パンサ説と、「将来生活への可能性への理性的判断が必要だ」というドン・キホーテ説です。さて、どちらが正しいのでしょうか？ どちらが、勝つのでしょうか？

「だが好き合う者同士が全部が全部、結婚しなければならんとすると、子供たちはしかるべき相手と、しかるべき時期に結婚させる選択の権限が父母から剥奪されることになるだろうな。また婿えらびが娘の意志に任せられることになったら、父親に仕えている下男を選ぶというようなことも起こ

ろうし、往来で通りすがりに一目惚れした、見てくれは元気のいい、気取った男だが、そのくせでたらめで、何かといえは刀をふり廻すようなやつを選ぶということもあろう。と申すのも、恋とか好き嫌いというものは、配偶者を選ぶのにきわめて必要な判断の眼をわけもなく盲目にするものだからで、結婚の選択は実に誤りをおかす危険にさらされているものだから、それをうまく切り抜けるには、すぐれた勘と、特別な天の恩寵とが必要じゃ。長い旅を思い立ってこれと同じことをしないのであろうかな、まして連れというのが、妻と夫のそれのごとく、寢床にも食卓にも、その他どんなところにも連れだってくるといたしたらな？ おのれの妻という道連れは、一度買ったら返したり、交換したり、買い変えたりできる品物ではないのじゃ。と申すのは、分離し得ぬ事柄で、生命のつづく限りつづくものだからじゃ。つまり、いったん首に巻きつけたら、たちまちゴルディオスの結び目に変わる綱のようなもので、死神の鎌が切り離さないかぎり、解く方法はないのじゃ」

それに対して、村人は、バシーリオのキテーリアへの強い思いを語ります。村人たちはバシーリオに味方しているのです。

「バシーリオが今にも破裂しそうな心をいだいていることは誰の眼にも明らかなので、彼を知っているわたしたちはみんな、明日結婚式で美人のキテーリアの言う『はい』という言葉が、バシーリオの死の宣告になりはしないかと気づかっているんです」

そこへ、晴れ着姿の新郎新婦がやってきました。花嫁を見たサンチョ・パンサは、その美しさに驚きます。ここで、サンチョ・パンサが、花嫁の美人描写を始めます。でも、衣装や飾り物の描写に終始しています。本人の姿形（すがたたち）はのべていません。結局は、「すげえいい女よ」ですませてしまします。先に、登場した「醜女」の描写は抜群でした。

「こいつは確かに、百姓娘の衣装どころか、美しい宮廷の貴婦人の身なりだ。たいしたもんだ。おらの見たとこじや、胸につけた飾りはすごい珊瑚（さんご）にちげえねえし、クエンカの緑色のバルミーリヤ織は、たて糸三十毛のピロードときやがった！　へへえ！　あの縁（ふち）飾りは白麻（しろあさ）のこまぎれだぞ！　間違いなしの婦子（しゅす）よ！　ところで、あの手はどうだい、黒玉の指輪をはめこんでよ！　あれが金の指輪、それも純金の指輪でなかったら、首をやるだ、おまけに一粒一粒が眼の玉がとび出すほどかかったにちがいねえ、まるで凝乳（ぎょうにゅう）みてえな真珠をはめこんでいるだ。畜生、淫売の子め！　え、なんて髪だい。これが入れ毛でねえっていうなら、おらあ生まれてこの方、あんな長え、あんな金髪は見たことがねえ！　いんにゃ、あの凛々（りり）しき、あの姿のよさに、文句があるなら言ってみろ、鈴なりに実をつけてゆれている棗椰子（なつめやし）つてとこよ。髪やのどのまわりにぶらさげた下げ飾りが、棗椰子の房になった実とそっくりでねえか！　おらあ、魂に誓っているのだが、すげえいい女よ、フランドルの浅瀬だって平気で通っちゃうだ！」

それにしても、美しいキテーリアの顔色はなんとなくさえないものがあったが、これは一般に婚礼を明日にひかえた花嫁は身支度でほとんどその夜は寝ずに過ごすという例にもれなかったからに相違ない。一行は、牧草地の一方に設けられた、絨毯(じゅうたん)や木の枝などで飾った舞台のほうへ近づいていったが、ここで結婚式がおこなわれ、ここから踊りや、そのほかの余興を見物することになっていたのである。ちょうどみんながその場所へ着こうというとき、うしろのほうで騒がしい人声が聞こえ、誰やらこうというのが聞こえた。

「ちょっと待ってもらおう、あさはかな、そそっかしい方！」

バシーリオ登場

その声、その言葉を聞いて、人々はうしろをふり返って、見たところ、裾のまわりに臙脂色(えんじいろ)の焰(ほのほ)型の細ぎれをつけた黒い長上着をきた男が叫んでいることがわかった。その男は、まもなくわかったことであるが、喪のしるしの糸杉の冠をかぶって、手には大きな杖をもっていた。もっと近くへやって来たとき、それが伊達なバシーリオだということがみんなにわかったので、こういうところへ彼が現われたので、何かいやなことが起こるのではあるまいかという怖れをいだいて、さっき彼の言ったことが、どういうことになるかと期待しながら、みんな黙りこんでたたずんでいた。

ついに彼はつかれた様子で、息をきらしながらやって来て、新郎新婦の前に立ち止まると、杖を地面につき立てたが、これは先のどがった鋼鉄の石突きだったからであった。そうして、顔色を変え、キテーリアにじっと眼をそそいで、ふるえをおびた、しわがれ声で、こういうことを言いはじめた。

「薄情者のキテーリア、きみはわたしたちが誓った神聖な掟によれば、わたしが生きている限り、夫をもってはならないということを知っているはずだ。それに、年月がたち、わたしの努力が実って財産ができるまでは、きみの名誉にふさわしい節操はなんとしてもきみに保たせたいとわたしが思ってきたことも、知らないわけじゃあるまいな。しかしきみという人は、わたしの正しい希望に対して、当然むくいねばならぬ義務に背を向けて、わたしに属すべき主人の座を、ほかの男に与えようとしているんだ。その男の財産が、通り一ぺんの幸運どころか、すばらしい幸運をその男にもたらしたというわけだ。そこでわたしは、その男がさらにあふれるばかりの幸運にめぐまれるようにと、といってもその男にそれだけの価値があると考えからじゃない、天意も幸運をその男に与えようとしているんだから、わたしは自分の手で、その男の幸運のさまたげになるにちがいない邪魔ものを、もしくは障害を取り除いてやるつもりなんだ、つまりわたしというものを取り除いてだ。万歳、金持カマーチョよ、忘恩のキテーリアとともに末長く、幸福な年月を生きるがよい！そして哀れなバシーリオは死ぬんだ、死ぬんだ、彼の貧しさゆえにその

幸運のつばさを断たれ、墓へはいるんだ」

自殺を図る

こう言い終わると、それまで地面に突き刺してあった杖をつかんだが、杖の半分はそのまま地面に残ったので、そのときまでその中にひそませていた、かなり長い剣の鞘(さや)だったことがわかった。ついで、柄と呼んでもいい部分を地面に立てて、何の遲疑(ちぎ:ぐずぐず)するところもなく平気で、しかも決然たる意図で、そのうえへからだを投げ出したが、次の瞬間には背中から剣の切先が現われ、ついで鋭い刃の半ばが現われて、この悲哀の男はおのが剣に差しつらぬかれて、自分の血を浴びて地上に横たわっていた。

また、一人、絶世の美女の犠牲者

さあ、この『ドン・キホーテ』の物語で、また、一人、絶世の美女に捨てられて死ぬ若者の話が語られました。これは、先ほど、絶世の美女マルセーナが「美人でどこが悪い」と啖呵を切ったお話を讀んだばかりでした。「**一読百解 I :220309美人と天才を擁護するドン・キホーテ**」 また、同じ話の繰り返しののでしょうか？ 退屈です。まあまあ、お待ちなさい。

すると、バシーリオの友人たちが、彼の惨めな哀れな最後に心を痛めて、介抱しようと駆けよってきた。ドン・キホーテもやはり、ロシナンテから飛び下りて、介抱しようと駆けよってゆき、彼を両腕で抱き起こして、まだ相手が息をひきとっていないことを発見した。人々は剣をぬいてやろうとしたが、かたわらにいた住職の意見は、懺悔(ざんげ)をするまでは、剣を抜きとってはいけない、というのも、剣を抜きとるのと息をひきとるのとは同時にちがいないのだからというのであった。しかし、バシーリオはいくらかわれに返って、苦しげな、力のない声で言いはじめた。

「残酷なキテーリア、もしきみがこの最後のぎりぎりのときになって、わたしに妻としての手を与える気になってくれたら、わたしのこの無謀な行為にも言訳がたつと考えることもできそうだが、この無謀な振舞いのおかげで、わたしはきみのものになるという幸福を手に入れたことになるんだからね」。

自殺を試みたバシーリオは、今際(いまわ)の際に、愛するキテーリアと結婚して死にたいというのです。キテーリアは、すでに、お金持ちのカマーチョと結婚することになっています。

住職はこれを聞いて、生身のよろこびよりさきに、魂の救いに気がつかって、これまで犯した罪と、今度のすてばちな決心の許しを、本当に心から神へお願いするようにと言いきかせた。これに対してバシーリオは、何をおいてもキテーリアが彼の妻であるという手を与えてくれなかったら、どうしても懺悔はしないつもりだ、それというのも、そのよろこびによっ

て彼の心も平静になるだろうし、懺悔をおこなう気力も出てくるにちがいないのだからと答えたのである。

ドン・キホーテは傷ついた若者のこの願いを聞くと、バシーリオはまことに正しい、道理にかなった、しかも容易に実行できることを求めているばかりか、カマーチョ殿も勇敢なバシーリオの未亡人を妻に迎えるとしたら、それは彼女を父親の手から迎えるのに少しも劣らず、面目をほどこすことにもなろうと、声高に意見を述べた。

「事ここにいたっては、ただ『はい』のひとことあるのみじゃ。しかも、それは口で言う以外の結果はもたらすまい、と申すのもこの結婚の寢床は墓場ときまっておるからですわい」

こういうことを一つ残らずカマーチョは聞いていたが、そのためにすっかり気も転倒して、どぎまぎして、どうしたらよいか、何と言ったらよいかもわからないありさまであった。しかし、キテーリアが妻としての手を彼に与えることを承諾するがよい、この世を絶望をいだいたまま出て行くことによって、この男の魂をおめおめほろびさせてはいけないと口々にたのむ、バシーリオの友人たちの声があまりに烈しかったので、それに動かされて、というよりそれに強いられて、もしキテーリアが手を彼に与えたいと思うなら、自分にいなやはない、それに、そうしたところで、自分の思いが満たされるのを、せいぜいひととき遅らせるだけのことだと言ってしまった。

すると、さっそく人々はキテーリアのところへつめかけて、ある者は口説き、ある者は涙を流して、またある者は効果的な理屈で、哀れなバシーリオに手を与えるように口説きたてた。しかし、彼女は大理石のようにこちこちになり、彫像のごとくこわばって、ひとことの返事も、考えつかず、できもしなければ、する気にもならないという様子であった。だから、もしこのとき住職が、このさいどうすべきか早く決心しないと、バシーリオの魂はやっと彼の齒のところへひっかかっているのだから、いつまでもどっちつかずで心を決めかねている余裕はないと、言いきかせなかったとしたら、とても返事などできなかつたにちがいない。

このとき、美しいキテーリアは、どうやら気もそぞろに、悲しみにうちひしがれた様子で、ひとことの返事もしないままで、バシーリオがすでに白眼になって、息づかいも急迫して、口の中でキテーリアの名前をつぶやきながら、キリスト教徒としてというより、[自殺をする]異教徒として今にも死にそうなきさまを示しているところへ近づいていった。ついに、キテーリアはそこへ行って、ひざまずいて、言葉に出さないうで、身ぶりで彼の手を求めた。すると、バシーリオは眼をみひらいて、彼女をまじまじと見つめながら、口を開いた。

花婿のカマーチョと花嫁のキテーリアと神の使いの住職と相集った仲間たちの双方の側の了解を得たので、バシーリオの願いはかなうことになりま

した。

「ああ、キテーリア、きみの慈悲心がわたしの生命をたち切る刃にしか役立たないというときになって、きみはやっと慈悲心をおこしてくれたんだね。もうわたしは、きみのものとして選んでくれる喜びに堪える力もなければ、わたしの眼を刻々とおおってゆく恐ろしい死の影の苦しみをさける気力さえもないんだからね！ ただきみに頼みたいことは、あわれ、わが宿命の星よ！ きみがわたしに求めてくれ、またわたしに与えようと思ってくれる手が、単なる儀礼的なものでもなければ、もう一度わたしを欺(あざむ)くためでもなくって、なんらきみの意志を押さえつけることもなく、正当の夫に与えるものとして、わたしに与え、わたしに許すのだと、心から打ち明けて言ってもらいたいんだ。それというのも、こういうせっぱつまったときに、わたしを欺(だま)したり、きみに対してあんなに真実をつくしてきた男に対して、いつわりをよそおったりすることは、間違いだからね」

こういうことを言っている間にも、彼はいくたびか気を失った。だからそこにいた人々はすべて、彼が失心するたびごとに、彼の魂が去ってゆくのだらうと思ったものであった。キテーリアは実につつましやかに、ひどく恥かしそうに右手でバシーリオの手を握りながら口を開いた。

ここへ来て、初めて、キテーリアは決断しました。花婿とみんなの許しを得て、死んでいくバシーリオと結婚することに決めたのです。

キテーリアはバシーリオの手を握り、結婚を決める

「どんな力だってわたしの意志をまげるだけのことはございませんわ。だから、わたしは自分の持っているいちばん自由な気持で、本当の妻としてわたしの手を差し出し、あなたのみ手をいただくんですわ。それも、あなたの早まった考えからお招きになったこの災難に、心が動揺なすったり裏切られたりしないで、あなたの自由なお気持でみ手を差し出してくださいった場合だけのことよ」

「もちろんさ」とバシーリオが答えた。

「心をかき乱されたりうわずったりしないで、天がわたしに与えようというはっきりした意識で、きみに差し出すのさ。だからわたしはきみの夫としてわたしの自由をきみの自由にまかせるし、きみにあげちまうつもりさ」

「わたしだってあなたの妻としてだわよ。あなたが今後長い年月生きていらっしゃろうと、わたしの両腕があなたをお墓へおつれしようとおなじことよ」

「この若い衆はうんとひでえ怪我をしてるにしちゃ」と、このときサンチョが口を出した。「えらくしゃべるだ。口説きやそのくらいにして、魂のほうのことに取りかかるようにさしてやらなきゃいけねえよ。わしの見たところじゃ、魂は歯のあいだっていうより、舌のうえにとどまってる

みてえだよ」

ここで、サンチョはあまりにも長いバシーリオの長台詞に少し疑問を抱きはじめました。

そこで、バシーリオとキテーリアが手を握り合っているの、住職はすっかり感激して涙ぐんで、二人の結婚を祝福してやり、新郎の魂に安らかないこいを与え給えと天に向かって祈った。すると新郎は祝福を受けたかと思うと、あっというまに立ち上がって、それまで自分のからだを杖代りにしていた剣をするりと、これまで見たこともない無造作さで引き抜いたのである。その場に居合わせたすべての人々はただ驚きのつばをのみこむばかりであった。すると、その中の詮索好きというより単純な連中が、口々に叫びだした。

「奇蹟だ、奇蹟だ！」

しかし、バシーリオはそれに答えた。

「ちがうよ、ちがうよ、『奇蹟だ、奇蹟だ！』なんてもんじゃないんだ、仕組んだんだ、仕組んだんだ！」

なんとまあ、バシーリオが自殺したのは狂言だったのです。彼は、優れた剣の使い手です。バシーリオはどうしてもキテーリアと結婚したかったです。それで、この策を謀ったのです。ただ単に、美人に惚れて、振られた結果としての自殺ではなかったのです。先の美人マルセーラの場合とは違うのです。自分の思いを全うさせるために仕組んだ「新たな美人物語」なのです。これは、悲劇ではなくて、喜劇なのです。楽しんで聞くに値します。

狂言だった自殺未遂

住職は何のことやらわからないで、あっけにとられて、かけよって両手で傷を調べた。すると剣はバシーリオの肉体や肋骨をつらぬいていたのではなくて、血がいっぱいはいった鉄の管の中へ収まっていたということがわかったが、それは実に巧みにとりつけてあって、後になってわかったところによると、血液が凍結しないように工夫さえほどこされていたのである。要するに、住職もカマーチョも、その場に居合わせた大部分の連中とともに、てもなく欺され、愚弄されていたのだと思った。ひとり新婦はこの馬鹿にされたことを口惜しがるような様子は少しも示さなかった。それどころか、この結婚はまやかしたのだから、効力のあるものではないはずだと人々の言うのを聞いて、彼女は改めて認めなおすとさえ言ったものだから、人々は残らず二人がおたがいに気脈を通じてこんどの事件をたくらんだのだろうと推測した。

カマーチョと彼に心をよせる連中は、この件ではすっかり面目を失ったので、武力に訴えてこの復讐をとげようと、いっせいに剣を抜き放って、バ

シーリオにつめよっていったが、バシーリオに味方するほとんど同じくらいの人数の人々も、またたく間に剣の報を払って剣を抜きつらねた。

すると、ドン・キホーテは馬に乗ったまま進み出て、槍をぴたりと構え、楯でしっかり身を守りながら、双方の間に空間をつくらせたのである。一方、こういう騒ぎをこれまで一度だって面白いとか嬉しいとか思ったことのないサンチョは、さきありがたい泡をすくい出した、素焼の瓶のあるところへ身をかくしたが、それは、そこが誰もが敬意を払うにちがいない、神聖な場所のように思われたからであった。

ドン・キホーテは大声をはりあげて言いはじめた。

ドン・キホーテの「聖なる場所」のみごとな演説

ここでのドン・キホーテの大演説もまた、見事なものでした。ドン・キホーテは、「恋と戦争は手段を選ばず」と昔から言う通り、バシーリオの策略は正当なものだということです。これは、ドン・キホーテ本人の結婚観とは違うのですが、彼は戦場で戦う騎士なのです。「戦争訓」は大事にしなければなりません。このドン・キホーテの発言のおかげで、悲劇の場所になったかも知れないこの場所が、喜劇の場所になり、そして、美人を愛する貧乏人の神聖な場所になったのです。なんと見事な「物語」でしょうか。

「あいや方々、控えられい、控えられい、愛情ゆえにこうむった屈辱に復讐せんとは言語道断。恋と戦いと同じことと申すことにお気づき召されよ、戦いにのぞんで敵を倒そうがために策略を用い作戦を練るは正当なありがちのことであるごとく、恋愛のいざこざにおいて、望む目的を達成しようがために、ただ愛するものを傷つけ面目を汚さぬことであれば、いかなる奇略、いかなる欺瞞も差支えないものと認められておりますわい。天意の正しくありがたい配慮によって、キテーリアはバシーリオがもの、バシーリオはキテーリアがもののござったのじゃ。カマーチョほもとより富者、いつでも、どこでも、欲するがままに、おのが喜びを購うこともできると申すもの。バシーリオにあるものは、ひとりこの羊あるのみ、いかに力を誇る者であろうと、これをあの男から奪うことはなすべきことでない。なんとなれば、神 [と住職] が合わせ給うた両者を、人間が離すことはできますまいぞ、それをもし企てる者があれば、まず、この槍先につらぬかるること必定と心得ませい」

そしてこう言い終わって、力いっぱい、あざやかな手練のほどを見せて、ドン・キホーテを知らなかった並みいる人々の心魂を寒からしめた。

一方、カマーチョの胸には、キテーリアのおのれへの侮蔑があざやかに根をおろしたので、いつしか慕わしかった彼女の面影も記憶から消え去っていた。そこで、思慮も深く、善意に充ちた男であった住職の説得がみるみる効を奏して、その説得のおかげで、カマーチョもその一味徒党も、心がしずまり平静を取り戻すことになった。その証拠には彼らはふたたび剣を

元の鞆におさめて、バシーリオの計略よりもキテーリアの移り気を責めたことであった。そしてカマーチョは、もしキテーリアが生娘でバシーリオを愛していたものなら、人妻になってもバシーリオを恋い慕うにちがいない、してみると、そういう女を与えられるよりも、取り除いていただいたことを天に感謝して然るべきだと、そういうことを考えはじめていたのである。

なんとまあ、だまされたカマーチョも納得したので、これだけの大芝居が、ハッピー・エンディングで終わりました。さらに、カマーチョは男を上げます。結局、この物語も、悪者は一人も出てこない「ハッピー・エンディング」で終わりました。見事です。

そこでカマーチョと一味徒党も、心なぐさみ、平静になり、バシーリオにくみする連中もすべて心の平静をとりもどしたが、金持カマーチョは、もはや翻弄されたことなど口惜しいとも、またさして重く見てもいないということを誇示するために、あたかも婚礼が実際におこなわれているかのように、祝いの催しをこのまますすめたいと思った。しかし、バシーリオも彼の若妻も、その一味徒党もそれに参加するのをこはんだので、彼らはバシーリオの村へ帰って行った。

というのも、貧しい者でも徳高く思慮に富んでいれば、その人に従い、うやまい、味方をする者ができるのは、金持に追従し、後について歩く者がいるのと少しも変わらないからである。みんなは、ドン・キホーテを勇氣のある、胸に毛の生えた男と思い込んだので、いっしょに伴っていった。

可哀想なのはサンチョ・パンサです。気前の良いお金持ちカマーチョの祝宴はつづいて行われるので、そこでたらふくご馳走に預かろうと狙っていたのに、ご主人さまのドン・キホーテがバシーリオの一行と一緒に連れだって出かけたのでは仕方がありません。黙ってついていくことになりました。それが、この美女キテーリア物語の結末です。でも、セルバンテスは、最後に書くのを忘れません — 「彼の心の中にはあざやかに印象を刻みつけていた」と。大食らいのサンチョ・パンサも、この事件の結末に満足したのです。

ひとりサンチョはカマーチョのすばらしいご馳走と祝い、それは夜中までつづいたのであるが、それを待っていることができなくなったので、心はいっこうに晴れなかった。そんなわけでバシーリオの一行といっしょに行く主人のあとを、げっそりと、わびしげについていったが、こうしてエジプトの煮込み鍋をあとにふりすてて来たけれど、彼の心の中にはあざやかに印象を刻みつけていたし、鍋に入れて持って来たほとんど食いつくしてなくなりかけた泡が、彼にとっては失われた幸福の栄光と豪華さを脳裏にうかばせるものであった。そうして、べつに空腹でもないのに、重い心をいだき、もの思いにふけりながら、相も変わらず灰毛の臆病に乗っかって、とぼとぼとロシナンテのあとに従った。

自作のパロディ物語

以上が、美女キテーリアのお話です。美女に振られて自殺する話は、すでに、「美女マルセーラ物語」で紹介しました。でも、この「美女マルセーラ物語」は、どうも納得いきません。美女マルセーラに恋い焦がれて自殺した数多くの若い男たちは、一人も救われることがないままで終わって仕舞ったからです。でも、この今度の「美女キテーリア物語」は、なんと、ハッピー・エンディングで終わり、完全に振られ、だまされた、金持ちのカマーチョまでも、愛されてもいない女と結婚しないですんだので、ホッと胸をなでおろす結末になったのです。めでたし、めでたしです。後味のいいお話でした。

結局、この喜劇「美女キテーリア物語」は、悲劇「美女マルセーラ物語」を元話としたパロディ物語だったのです。ドン・キホーテ＝セルバンテスは、悲劇の借りを、喜劇で返したのです。見事です。むろん、自作の悲劇物語を元話として、喜劇でパロディを作るのは、並大抵の腕や見識や図々しさでは出来ない相談です。このことから、セルバンテスが、超一流の物語作家であることが分かります。最後は、ご馳走にあぶれた可哀想なサンチョ・パンサのうしろ姿で終わりますが、おわりに追加された一言 — 「彼にとっては失われた幸福の栄光と豪華さを脳裏にうかばせるものであった」ですべてが救われます。最後の最後まで、上手いものです。

あっ、忘れていました。結婚論の結末です。サンチョ・パンサの「愛し愛され論」とドン・キホーテの「現実の生活持続論」との勝負でしたね。今回の「美女キテーリア物語」では、勝ったキテーリアとバシーリオにとってはサンチョ・パンサの「愛し愛され論」でしたが、結婚に破れたカマーチョにとっては、長い結婚生活を送る上ではキテーリアは適していなかったのですからドン・キホーテの「現実の生活持続論」も勝ちというべきでしょう。どちらにしても、結婚は難しいものだということです。

都築正道